

九月のテーマ

心と形

# 形が先か 心が先か

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。



え・古屋智子

ふ

わやかに晴れ渡った日曜の午後、Sさんは、のんびりと昼寝をたのしんでいた。ふいにガチャンという音がしたので目をさまし、玄関に出てみると、ガラスが一枚割られていた。向かいの店員が「今行った自動車ですよ」と教えてくれた。道路の小石をはねとばしたのだ。

ふいに目の前にスーッと影がさして、一台の車が停まった。二十二、三歳くらいの運転手が降りてきて、ていねいに頭を下げ、ガラスを割ったことを詫び、運転席から一枚のガラスと、ガラス切りを持ち出した。そして戸の大きさはかると、器用な手つきで端を切り、手早くガラス戸にはめてしまった。

「実は、さきほどガラスを割ったとき、ハツとして車を停めたのです。そして一言お詫びをしようと思ったのですが、その時送っていたお客さんの乗る列車の時間がギリギリだったものですから、そのまま車を飛ばしてしまっただけです」

その言葉に少しも嘘がないことがよくわかり、感激さえ覚えたのだ。「わざわざどうもありがとう」と

礼をいうと、運転手は、思い出したように、「ガラスを割った石が落ちていなかったでしょうか、あつたら頂きたいのです」といった。

その小石を差し出すと、大事そうにハンカチに包んで、運転手はちよつとはにかみながら、「私は幼いときに父に別れ、昨年たつた一人の母もなくなりました。その母は『正しく生きよ、どんな小さなことでも、良心に恥じることはするな、母は死んでも、母の魂はいつもお前のそばを離れない』と喋り息をひきとつたのです」と話し、「この小石は、私の良心のマスケットにして大事にします」といつて出ていった。

まごころは尊い。その心はおのづから、身体はどこかに現われる。「これは自分のしたことだ、すまなかった」という心がほんとうにあれば、おのづから詫びにいき、弁償をするという形に現われる。

ところが、形から入ってほんものになる場合も実に多いのである。たとえば姿勢である。姿勢をまっすぐに正しく保っておれば、心もまっすぐ正しくなる。挨拶なども形から正

しく、きちんと、ていねいにするように努めていると、やがて心もそのようになってしまう。

「小さなことでも、良心に恥ずるようなことはしないで」という母のさとし。これを完全に実行することはむずかしいかもしれない。だからといって、ぐずぐずと迷うべきではなからう。いつも母の教えに従いたいと思つたとき、少々恥ずかしくとも、「ガラスを割った小石を下さいませんか」と頼んでみる。そのような行為に思いきつて出たとき、いよいよ心はすっきりしてその小石が「良心のマスケット」になる。

心がもう一つはつきりしないという場合、一歩進んで形に現わすようにすると、ぐつと心がひきしまる。坐禅とかみそぎその他の行といううなものは、このようにして心を一段とひきしめることを、まず形から入っていきこうとするのである。愛情はあるけれども、何もしなくてよいのだとか、念願はしているけれども、形に現わす必要はないのだとか、そうした一方的なことは原則的にはまちがいである。『つねに活路あり』より